

# 露國創刊日露辭典及其編纂者

龜田次郎

電西亞の文化は、十八世紀の初彼得大帝の時代から始まるので、該國に於ける言語研究の歴史も、亦この時代から始まつたのである。我日本語研究が、露西亞で始まつたのも、此時代に屬する然らば露西亞に於ける我日本語研究は如何にして始まつたといふに、彼得大帝は極東までも手を延ばし、カムチャツカを征服して、露國の領土が日本と相對するに至つたので、遠き考を有して居た彼得大帝は他日必日本と事を醸す日あるべきを慮り、日本語學習の必要を認めて、其教授の基を開いたのである。彼得大帝は、我日本に向つて探險隊を派遣した外に、尙一七〇二年（元祿十五年）四月二十八日附の勅令を以て、當時カムチャツカに難破漂着した日本人傳兵衛といふ者を、露西亞語學習の爲本國砲兵省に送り遣すべく命じた。これは傳兵衛をして當時創設される日本語學校の日本語教師たらしめる爲に先、豫め傳兵衛に露西亞語の素養を修得せしめておく必要があつたからである。傳兵衛は約三年半の間露西亞語を學んだといふ事である。それで一七〇五年（寶永二年）勅令で、ベラルブルグに日本語學校が創立され、傳兵衛は一躍して最初の日本語學校の教師となり、「露西亞に於ける日本語研究學校

教師」の稱號を授けられたのである。これが抑露西亞に於ける日本語研究の起源である。然るに傳兵衛一人では其死後教師に困るのみならず、折角創立された日本語學校の前途が案じられるといふ所から、露國政府は、我漂流民をカムチャツカからベテルブルクに送らんことを、屢四比利亞省へ請求したのである。この訓令に依り一七一〇年(寶永七年)カムチャツカ半島のハリガルスキー岬(Haligasky)に漂着する漁夫サニマを翌年に送つた。此サニマは傳兵衛の助手となつて、日本語學校に教鞭を執つたのである。サニマは後露西亞正教に歸依し、露國婦人と結婚して、アンドレイ・ボグダーノフ(Andrei Bogdanof)といふ男子を設けた。此男子は後年ベテルブルグ大學附屬圖書館次長となつた。此人が露西亞で最初の日本語文典、辭典、會話等を書いた者である。斯くの如くして日本語學校は後年まで繼續したのである。傳兵衛、サニマ兩人の死後は我漂流民で露西亞正教に歸依した二人の者が、また日本語教師に任命されたのである。此二人の事蹟は、一七二九年(享保十四年)にカムチャツカ半島の南端ロバツカ岬(Topacka)に漂着した日本船員十七名中十五名は其地で慘殺され、二名は捕虜となつた。この生存した捕虜はソーゾウ(宗藏?)、ゴンゾー(權藏?)といつて二十八歳と十五歳との若者であつた。兩人は本國政府の命によつてベテルブルクに送られてアンナ女帝に謁見仰付られ露西亞正教に歸依してソーゾウは姓をシェリツ(Shelits)名をヨシマ(Koima)と改め、ゴンゾーは姓をボモルツエフ(Pomortsef)名をデミヤン(Demiyau)と改めた一七二九年(元文四年)七月三十日ボモルツエフの方は、日本語教師に任命されて、年俸百留を支給された。此ゴンゾー即ボモルツエフは前にいつたサニマのネボグダーノフ監修の下に日本語の入門というやうなもの五冊、即文典、辭

典、會話等を編纂した。此等の書類が露西亞で出來た最初の日本語學書で、手書の儘ベテルブルク學士會院附屬亞細亞博物館に保存されてゐる。此等の語學書中第一に出來たのは辭典で、百〇四頁次は會話で七十頁、次に日本文典三十八頁、その外露和新辭典がある。これもボグダーノフの筆に疑無く三百八十二頁の大冊である。最後に又露和會話八十頁のものがある。此等は何れも一七三六年から三十九年（元文元年—四年）の間の編纂である。斯る教師斯る状態の下でこの短日月に此程の仕事をしたボグダーノフの精力は感服に値するのである。此等稿文の序文に依ると、ゴンゾーは十一歳の時に日本を離れたので、殆んど日本の文字を知つて居なかつた。日本語は彼にとつては支那語同様に非常に困難であつたといつてゐる。此等の書籍は皆露西亞語のアルファベットを以て記され、日本語では記されてゐない。ゴンゾーは天才肌の少年であつて、露西亞語に精通し、日本語の教授が上手であつた。ベテルブルク大學附屬土俗學博物館には蠟製のソーゾー及ゴンゾウのマスクが保存されてあるがこれは兩人の死後美術家コンラード (Konrad) が大學の命を受けて製作したものである。此等の書籍は固より需要の少かつた爲に印刷されなかつたが、然し日本語學校は非常に實用上に貢献を與へたのである。一七四二年（寛保二年）に、シバンベルク (Shpanberg) 尉一行の日本探險の際に、學生二名は隨行して通譯となつた。此遠征後、政府は益日本語學習の必要を認めて、西北亞のヤクツクに第二の日本語學校を開設したのである。後一七五三年（寶曆三年）に至つてベテルブルグの日本語學校は、イルクツクに移轉され、また久しからずしてヤクツクの日本語學校は、イルクツクに合併され、このイルクツクの日本語學校は後一八〇五年（文化二年）遂に同地中學校に合併されて仕舞ひ、

一八一六年（文化一三年）に至つて經費不足の理由の下で、全く閉鎖の運命に遭遇したのである。丁度上記日本語學校合併時代に屬するとおもはれる書籍が二種あつて、其一は教詞其他小句を集めたもの、其二は會話篇で、ピョートル、チェルノイ (Pyotr Chernoy)、マートンノイ、ポホン (Martvey Popoff)、イワン、アフォナシエフ (Ivan AfonasiEFF)、フイリン、トラベンツニコフ (Philipp Trapenznikoff) などいふ日本人の署名があり、明かに當時西比利亞の日本語學校の編纂したものである。これも學士會附屬亞細亞博物館に保存されてある。此二書の外になほ同時代に屬すべき露和辭典があつて、比較的大冊である。此はヤクツク日本語學校教師中の一人アンドレイ、タ、リノフ (Andrey Tatarinoff) の編纂にかゝる。此男は一七八二年（天明二年）に死んだとあるから、此時代に近いものと見られるのである。これも學士會院附屬亞細亞博物館に保存されて居るのである。露西亞に於ける日本語研究は斯の如く實際的有事の日に必要といふ理由から實用的の目的のために、日本の漂着民を捕へて、これが教師となし、漸次其歩を進めて後世に及んだのである。今自分は只茲に其研究の端緒を述べ、事業の一斑を記したに過ぎぬのである。詳細な日本語研究の歴史は、他日機を見て更に述べようともふ。

## 二

露西亞が東方亞細亞經路に手を染め出したのは、十六世紀の中頃でイワン四世 (Ivan IV.) の時代である。後ピーター大帝やカザリン二世 (Catharine II) などが亦大に東方經路に力を用いたのである。これは十七世紀末から十八世紀末に至る間の事である。爾後歴代の皇帝は絶えず之に意を注いだ

から、其結果露西亞の領域は歐亞二大洲に跨つた大國となつたのである。我日本との交渉も、ピーター大帝の世に端緒を發し、爾後代々其計畫を繼承したのであるが、我日本語學書類の編纂は、少し後日の事に屬するのである。此等の語學書類は未刊で終り手書の儘でペテルブルグ學士會院附屬圖書館に遺つてゐる。何れも皆目的とする所は露國の日本經略上の實用的必要から出來たものであるが、これは何れもピーター大帝治世以後のもので、一は十八世紀の初、一は同紀中頃の編纂である。其編纂の徑路については、已に概略上記の通である。今自分は此等の日本語學書に次いで出來て、而も露國で最初の刊行本であるものについて、聊述べようとおもふのである。

自分は茲に紹介する露國創刊の日本語學書は、一八五七年（安政四年）ペテルブルク出版の日露辭典である。下の書名を有つて居る即ち冒頭に漢字行書體、次に露西亞字で記した

和魯通言比考 Russko-Japonskij Slovar'.

とある。其下にゴシケーウイツチ編纂日本人橘耕齋・補助(Sostavlenyj I. Goshkevichen pri posobii ja-poneca Tachibana no Koosaj. Sanktpeterburg. 1857.)と表記してある。洋字は總て露西亞文字であるが、印刷上の都合で、本稿にはこれを羅典文字に書き換へておく。以下皆其通である。編纂者が日露兩國人であるのが奇とすべきであるのみならず、當時鎖國令嚴行の世に而も日本人の姓名が明かに記され露西亞文字の下に漢字行書體で橘耕齋と印刷してあるのは、最吾々の不思議に感ぜられる所である。今本書の内容其他につきて述べよう。

本書は一卷本で、大きさは四六倍版で、全篇四百八十六頁で、表題二頁、序文(Prodislovie)十七頁、

本文日露辭典 (Japonsko-Russkij Slovar') 四百二十三頁最普通用漢字表 (Tablica upotrebitel'nejšich kitajskich znakov) 三十八頁、訂正増補 (Popravki i Dopolnenija) 三頁ある。只本書の印刷で茲に一寸いつてあかねばならぬ事がある。それは表題の露西亞文では、露日辭典となつて、本文には日露辭典と印刷してあるのと、本文二百九十七頁から三百〇四頁までの間が錯簡になつて居るのとである。此は正誤表にも何等記す所が無い。多分出版を取急いだがための失策であらうと考へる。先内容について述べよう。表題の初葉は上記の通であるが、次葉の上部に「皇帝陛下の御忠召に依り外務省亞細局より出版す」と記し、下部に「印刷所ヤ、ヤンソン (J. Jansson)、石版所ゴリケ (R. Golike)」とある。次に序文は本書の由來や編纂者の意見が詳述してある。此は大に吾々に參考となる點が多いから、必要な所を抄譯して示さう。

序文の最初には日本語及文字について論じて居る。即ち日本語には二分子があつて、それは純粹の日本語、支那語である。純粹日本語は特質上長くなるから、簡便に言ひ現はす爲に、支那語を使ふようになつた。又日本には應神朝に王仁來朝の事あり、後弘法大師は支那語をば日本化したのである。日本にては平假名の發明あつたが、これは綴音文字であつた。只後世の作であるといはれる「ん」が音文字である。又別に確證は無いが吉備大臣の作といはれる片假名の發明も出來た。この平片兩假名發明以前に漢字も日本語を顯はすために用ひられて、日本の古歌集萬葉集に用ひられたので、萬葉假名と唱へられた。この萬葉假名が以上兩名發明の動機を醸したものである。此三假名の外に、大和假名略書等種々のものがある。日本、支那文字を合略した所謂合略字もあるといつて、種々の例證を舉げ、

四十七文字を示し、又五十音をも掲げて居る。五十音でオ、ヲ、の所屬を誤つて居るのが特に注目すべきである。尙各行に亘つて論じて居るキ、エ、のイ、エと混淆して居る事や、多行 *Ti, Tu* の *Chi, Chii* と發音する事や、ユルラード (*Collatio*) の文典にも此等發音の困難であることをいつてあると記して居る。又フ音の折衷的發音の事し音を開港地、大阪附近の人々の發音難澁してR音に發音する事濁點、半濁點、音韻轉訛等をもいつて居る。又文字の使用は平假名漢字、萬葉假名を用ひるが、片假名の使用が極めて少い。假名字の出版物は無教育者用のもので、教育者用には漢字の出版物で、假名は只其漢字の助辭にのみ用ふるのであると舊幕時代の狀況をいつて居る。又漢字は支那音で使用する外純日本語に用ふる場合には、また國訓で譯する。この場合には漢字の語尾は捨假名を附する。漢文で書いた最籍も甚だ多數であるが、この種のものには三ある。即ち

漢字の右傍に直譯を附ける。  
了解を容易ならしめる爲に、語尾と助辭とを假名で示す。

和漢兩語其順序が異つて居るから、漢字の左傍に返り點を附ける。

と述べ、最後に漢字は現代に於ても、各省に依て發音を異にするが、昔から歴代其發音が異つて居るのである。各朝各其出生地の音を發して居た。これが言語に大影響を與へたのは當然である。然し文字は依然として同一である。只其發音が何地のものであるか、明かでないのである。日本人は此漢字の發音を各歴代のものでいふから、支那哲學考古學等を研究するには、日本に於ける漢字發音の研究が最必要である。從來日本に於ける漢字音には三ある。漢音、吳音、唐音がそれである。此三種の發

音以外に日本流の翻譯がある。人名には此三種音の何れか、日本流のものかを用ふる。それで日本人の讀方は甚面倒であると述べて居る。以上は日本語及其文字についての論述で、今日吾々が見たならば何等異とするに足らない事柄であるが、當時外人の觀察した論述としては、大に感ずるに値するものがある。これは序文の初頁から九頁の半までに詳述してある大綱の抄譯である。

次に歐洲人の日本語研究について詳しくいつて居る。今下に其論を譯出せう。

日本語については十六世紀の中頃から歐洲人に知られてゐたが、然しこの研究は從來餘り進歩しなかつた。歐洲人は宗教的、商業的、學術的、政治的の諸理由から日本國民の事情を研究せねばならなかつたにも拘らず、斯る有様であつたのである。日本に最初渡來したジエスイツト教徒が其宗旨に歸依した日本人に翻譯的の說教では何時迄も満足する事が出来なくなるのは當然である。何故ならば其說教は皆羅句語で書かれてあつたから、それを日本人の前で説くと全く異つた感想を起させる事が屢々あつた。後或大島に到着し間も無く耶蘇教學校を建て、日本語研究入門の如き書籍を刊行した。其等の書籍は當時から現今まで遺存し、又は各種の圖書館で珍籍として取扱はれて居るのが、文典三種辭典三種ある。先其文典の著者はアルバンソ、(Alvarez)ロドリゲス(Rodriguez)コルラード(Collado)三人である。即

Eman, Alvarez De instituzione grammatica Libri III Cum Versione Japonica. In collegio S. J. Annacensano. 1593. in 4°.

Arte da lingua de japam, Compоста pello P. Joas Rodriguez. Nagasagui. Coll. de Comp. de J. 1604



in 4°.

Ars grammatica Japonicae linguae. Composita à Fr. Didaco Collado. Romae, typis Congreg. de prop. ag. fide 1632, in 4°.

である。アンバネーツ文典については、何ともいへぬ。只ランドレンス (Landress) の引用したものに依つて知つたのである。書名から考へると、羅甸文典で、天草所在學校の日本人の爲に著されたものと思はれる巴里亞細亞協會設立後、間もなく日本語研究書不足のためロドリゲズの文典を少し添削してランドレンスの爲に次の名にて刊行された。

Elémens de la grammaire japonaise, par le P. Rodriguez, traduits du Portugais sur le Manuscrit de la Bibliothèque de Roi, et soigneusement Collationés avec la grammaire publiée par le même auteur à Nagasaki en 1604, par M. Landress, membre de la société Asiatique, précédés d'une explication des syllabaires Japonais par M. Abol-Rémusat. Paris, 1825 in 8°.

アンル、レニニューザーに依つて假名の説明が加へられた。後日男爵フンボルト (Baron Humboldt) の書いた、

Supplément à la grammaire Japonais du P. Rodriguez etc. par M. le Baron G. de Humboldt. Paris, 1826. が附録として添附された。斯く多數の學者が従事したので他の文典に比べては材料豊富であるが、同じ缺點を有し失敗の著作である。即ち其文典の著者が羅甸文典を標準として其形式に適せしめ様としたからである。コルラード文典は種々の點でロドリゲズ文典よりは劣るが、またロドリ

グーズ文典の附録、説明として多くの面白い註釋が見える。著者は文典を著す際、先輩の著作を見たに相違はないが、大體は其に準據せなんだ様である。フンボルト男は、上記の附録に於て第四の文典について論述して居る。其文典はメキシコ版で、オヤングレン (Oyanguen) の著である。此書については茲に省略して述べないが、只書名丈を示さう。

Arte de la lengua Japona, dividido en quatro libros segun el arte pe Nebrixa, con algunas voces proprias de la escritura, y otras de los lenguages de Ximo y del canji, y con algunas perifrases y figuras, etc. compulso por el Hermano Fr. Melchor Oyanguen de santa Ines. etc. Mexico. 1738 in 4.

次に最近ノオン・ド・ロニー (Leon de Rosny) は、次の日本文典を著した。  
Introduction a l'étude de la langue Japonaise par L. Leon de Rosny Paris, 1857 in 4.

氏は曰はく、日本語は他國語と全然異つた性質を有つて居るから、日本文典を著す前に、日本語風を知らねばならぬと。氏は之を熟知して説明は非常に簡明に記してある。又支那文字も説明をして居る上記諸種の文典は皆羅馬字でのみ記して居るのである。

以上は文典についての論述であるが、續いて辭典についていつて居る。其は、

日本語の最古の辭典は、最初刊行の日本文典と同所で出版された故に、文典の著者も此辭典編纂に參加せるならんと思はれる。第一は、

Dictionarium latino-Istianicum ac japonicum, ex Ambrosii Calepini volumine de promptum, in quo, omnis nominibus propriis tam locorum, quam hominum, ac quibusdam aliis minus usatis, omnes voca-

balorum significaciones, elegantiores que decendi modi appointuntur, in usum et gratiam japonicæ juventutis, quæ latino idiomati operam navat, nec non Europæorum, qui japonicam sermonem addiscunt. In Amæusâ, in collegio jap. S. J. 1595 in 4°.

である。本書の編纂は次の二目的を達した。即ち羅甸語の或言葉の意味を先葡萄牙語で説明し、其に適當した日本語又は葡萄牙語の翻譯が日本語に適用されるのである。第二は日葡辭典で、

Vocabulario da lingua de japon com a declaracao em portugues, feito por alguns padres e irmaos da companhia de Jesu, Nagasqui, no collegio de Japan de companhia de Jesu, 1603, in 4°.

の表題である。此書は間もなく西班牙譯となつて、マニラで出版された。即ち

Vocabulario de Japan declarado primero en portugues por los padres dela compania de Jesus de aquel reyno, y agora en castellano en el collegio de S. Thomas de Manila, en Manila, 1630, in 4°.

是である。第三はコルラードの辭典で前記文典の著者と同一の人である。書名は、

Dictionarium, sive thesauri lingue japonicæ compendium a Fr. Didaco Collado, Romæ, 1632 in 4°.

である。序文に依ると、本書は宣傳學校の爲に編纂したもので、日本の書物や他の資料は座右に無いので、皆記憶に依て編述した故に非常に不完全なものである。本書印刷中に本文以上の附録が出來たのである。此書は歐洲刊行なるに拘らず、日本刊行の上記諸書と等しく珍籍 算へらるものである。我露國ホテルブルク帝室圖書館に一部所藏されてある。此辭典の大缺點は、日本語全部羅甸語で記してある事である。

爾後二百年間は歐洲の諸雜誌、旅行記、日本關係記録には、日本語の記事散見してあるが、純粹の日本語研究書は現はれなかつたのである。和蘭人は葡萄牙人を逐拂つて、只自國入才が日本在留を得たが、當時暫くの間は其日本人との通商上ではブロンクン葡萄牙語を用ひてゐた。其後日本人が和蘭語を覚えてから、これで相互談話を交へたので、最早日本語研究は彼等に不要になつたのみならず、また研究は不可能になつたのである。何故ならば日本語通詞は自己の利益上から之を許さなかつたのである。或和蘭商館長は十八年間日本に在留し、其間に蘭和辭典を編纂せうとして、日本人に和蘭語を説明し、適當な日本語を聞出して、自己の著作に之を羅馬字で記したが、其歐洲へ歸る時には、此不完全な著作でさへ持歸ることが出來ないで其儘日本へ置いて歸らなければならなかつた。これは日本語の秘密を彼土に知らすのが日本語の好まざる所であつたからである。(Siebold : *Isagoge in Bibliothecam japonicam*, P. XXI. 參看) 其以前一八一〇年日本に於て日蘭語辭典の翻譯、(Nieuwverzaameld japonsch en hollandsch woordenboek) が出版されたが、これを基礎として尙他よりも材料を採つて、メツハムスト(Medhurst)は英和和英語集 (*An English and Japanese and Japanese and English vocabulary, compiled from native works by W. H. Medhurst, Batavia, 1830 in 8.*) をペンキヤで出版した。此書は小冊子で、眞面目な研究用には無用のものである。且編纂者は立派な漢學者であるに拘らず、日本語に精通しなかつた爲に、多くの誤謬を生じて居るのである。

シーボルト (Siebold) は日本滞留中日本語撮要 (*Epitome linguae Japonicæ*) を著した。彼は日本語辭典が最必要であるとして其編纂に要する多くの材料を蒐集したが、それに關する原本は三十部以上

に達した。數多の和蘭人の日本語研究の草稿及和蘭語を知つて居る日本人の總ての典籍を網羅して研究した。(Isagege in Bibliothecam Japonicam, P. III. 參看此材料に依つて下の三書を著した。)

一、漢字集(部首で排列した)

二、千字文

三、和漢音釋書言字考(Thesaurus linguae Japonicae, sive illustratio omnium, quae libris recepta sunt, verborum ac dictionum loquuae tam japonicae quam sinensis epus japonicum in lapide exaratum a sinensi Kōtsching-dschang, Iygduni Batavorum, 1835.)

である。一は漢字の前代の發音を研究するに必要なもので、二は屢種々の翻譯を附して出版せられたるものであるが、自分は此書刊行の意が不明である只面白しといふに過ぎないのである。支那語で千箇の文字を並べて文が出来るといふ事を示すに止まるので、一般言語學及日本語研究上には何等の裨益が無いのである。元來日支兩語全く性質を異にして居るのである。三は日支兩語全部を網羅してゐる譯では無いが、日本では一番良好なものとせられて居る。他に歐洲語の翻譯が無いからである。日本から書籍を取寄せる事は中々面倒であるから、本書は歐洲學者の好參考書である。此書を底本としてアウグスト、フイツマイヤー(August Pätzmaier)が日獨英三國辭典を編纂にかゝつたが、一八五一年から今日迄に一冊しか出版されな。 (Wörterbuch der japanischen Sprache, von August Pätzmaier, Wien, 1851, 8r. 4.) 而も此出版の一冊は全篇の三十分一に過ぎないのである。ロニー(Rosny)は、不日日佛英三國辭典(Dictionnaire Japonais-français-anglais qui s'imprime en

or moment) を世に出さんと自分に約束した。

以上は辭典に關する意見である此歐洲人の日本語研究史は、序文九頁の後半から十五頁の前半までに記されてあるが、自分は此を讀んで感じた事は、從來我日本語研究の初來歐洲人に依て仕遂げられた事蹟については、世人は皆英人エルネストメエン、サトウ (Ernest Maizon Satow) の日本耶蘇會十刊行書目 (The Jesuit Mission press in Japan, 1888.) 中に載つて居るのを、最初の研究の様に思つて居る様であるが、此書より三十有餘年以前に已に斯る所論の在るのを見て、吾々は感服に堪へぬのである。尤もサトウの書目には、文典四部、辭典四部、合計八部の解題が見えて居るが、此日露辭典序文四部、辭典三部合計七部より記して無い。前者に見える一五九八年版の落葉集 (Racvysov) といふ伊呂波順に排列した節用集的の辭典の事が記して無い。これは創業としては止むを得ない事であらう而も此落葉集はサトウ自身が本邦駐在中に購入したものであるから、日露辭典編者が當時知らなかつたのは無理ならぬ所である。尙今後或は他の珍籍が発見せられるかも知れぬ。前人の研究が後人の討究より不完全なのは理の當然である。只自分はサトウ氏より以前に斯種の研究が已に在つた事を紹介すれば宜いのである。日本開國以前に此の研究が在つた事は實に驚嘆すべきものであると信ずる。次に辭典編纂の由來刊行の徑路を述べて居る。此は本書の成立を知るに最重要の所であるから、下に譯出する。

自分が此辭典の編纂に従事し初めた時は、未だ歐洲に於て最近の東洋學者の研究が現れない時代であつた。自分が日本へ來る機會が出来たので、此機會を以て從來餘り世に知られてゐない此言語を

研究するのに利用せうと決心したのである。當初は進歩が遅々たるものであつた。何故ならば長崎に於ける日本通詞等は自分に日本語を容易に話して呉れなかつたからである。自分に起つて来た不幸の出来事は、却つて自分には幸となつた。其れはダイアナ (Diana) 號を失ふたこと、又戦争のために半歳以上も日本に滞留したことである。處が一方では他邦人と固く契約を結んで、日本人とも段々親密となひ、自分を信用して呉れる様になつたので、何事も打明けて話して呉れた。後聞も無く捕虜となつて英艦隊に九ヶ月間ばかり居た時には多くの暇日があつたので、座右に日本の知人から餞別として贈つて呉れた少數の典籍の中に五部の小辭典があつたので、其中で最善良なものを採つて、此辭典の底本とした。其底本の語詞をアルファベット順に排列して、人名、地名の類は殆んど省略した。其代りに他の書籍から最普通の語詞一千語程を増補として入れた。總て日本の辭典は其目的が日本語を説明解釋するのではなく、漢字で如何に書き現はすかを示すにある。それで日本語の傍に各種々の漢字が當て嵌めてある。又この漢字も屢聲音をあらはす爲めに使はれて熟語の意味をあらはさない大辭典(例へばシーボルトの出版したる)でさへも、説明解釋の代りに出典丈を記してゐる、若し語詞に幾つもの意義がある時には、其を區別するために、唯簡單に説いてある丈である。而もそれも漢字を選擇するに必要なのに止まるのである。若しも日本語の原語に二つのシノニムがある場合には、其一は屹度辭典には見えてゐない。又シノニムを引用するに必要ある場合には、其語詞を指定せずして只頭字丈を指してゐる。然し漢字丈には詳しい説明解釋が見えてゐる。實をいへば日本人の爲めの漢語の辭典で純然たる日本語の意義を確かめるには中々困難を覺え

るのである。自分の座右には必要な漢語の辭典の外に、天草出版の羅葡日辭典、ロドリゲス、コルレードの文典メヅルストの語集があつた。此辭典を編纂するに當つて非常な補助を與へ、語詞の説明解釋を致へて呉れたのは、亞細局勤務の橋耕齋氏である（此辭典石版の本文は此人の手書である）。又皇帝陛下の御裁可を經、出版費を支出した亞細亞局は種々の材料を自分に供給して大に事業を補助せられた。又此辭典にはジーボルドの *Fauna japonica* 及 *Flora japonica* に所載の動植物名を其出典を加へて記入した。

本書印行に際して、中々困難を經た。日本字、殊に漢字の完全な活字が無かつた。それで此兩邦の文字を作製するには、巨額の費用と長時日とを要するから止むを得ず、他に方法を案出した。即ち印刷と石版とを同時に使用して併せて全部石版刷にした。日本語は體裁上書中に所載のため印刷し漢語の熟字はメヅルスト氏著述の前例を踏襲して之を加へた。純日本語も主に漢字で書くから、本辭典の附録に、最普通の文字を集録した。此附録は日本の伊呂波順に排列した。初めに片假名、傍に其假名の原字、次に平假名及其諸體、原字たる漢字、最後に一漢字であらはず日本語、其草行楷三體、露西亞語の翻譯を記した。此表を作製した目的は研究者を漸次略字に慣れしめるにある。日本人は常に略字を使用するからである。

一千八百五十七年八月二十八日、イ、ゴシケーウイツチとある。これは序文十五頁後半から十七頁までに記してあるのである。此自序の文で見ると編纂上の苦心や日本人橋耕齋に非常な補助を受けた事などが明に知られるのである一々詳述するに及ばぬとあもふ



次に本文であるが、これは伊呂波順に排列してあつて、各語の初には片假名、其原字の漢字（萬葉假名）、平假名を大文字であらして見出し、各葉縦に二欄に分ち各語を片假名漢字露語であらして最後に訓、音を片假名で示してある。又各葉欄外に其初未兩行の語詞頭字を二字若くは三字で見出をつけてある。只本文で面白いのは漢字は左右に並べて記してあるが、日本字は片假名で上下に記してそれを横向にしてある。維新前の洋人の著作にはこの書方や印刷が普通である。此事は印刷史又は文化史の上から見て注目に値する事柄である。又本文の解釋から見て日本語が駿州方言の交つて居る様である。これは補助者橘耕齋の出生地の關係から起つて現象であると思ふ。

次に最普通用漢字表は、序文に見えて居る通り、伊呂波順に排列して、初めに片假名傍に其原字（萬葉假名）次に平假名諸體其原字最後に一漢字であはらす日本語其草行楷の三體、露西亞語の翻譯を羅列してある。

最後の訂正増補表は書中の正誤表である。別に取立てゝいふ程のものでもない。

以上述べた所で此辭典の内容は明かつたであらうと思ふ、本書については從來餘り世間で知らなかつた様であるレオン、バジエーの日本書史(Leon pages: Bibliographie Japonaise.)にも本書の名は見えてゐないウエンクスタルンの大日本書史(Er. Von Wenkster: Bibliography of Japanese Empire.)には勿論見えないのである。自分の知つて居る所ではメシヨンの亞細亞書史(V. Méjow: Bibliographie Asiatique, 1891-1894, St. Petersburg.)に見えてゐると、近くコルチャールの日本書史(Henri Cordier: Bibliotheca Japonica, 1912, Paris.)に載つてゐると丈である。此兩書史共に此辭典につきて、刊行當

時シチューキン (Soukhin) が一八五八年にローニー (Leon de Rosny) が一八六一年に書いた批評の事が見えて居る。自分が本書を知つたのは去明治四十五年六月十一日午後、東京市小石川區傳通院で海上遊鷗遠遊會が大槻如電、文彦二氏主催の下で行はれた時、展覧出品の中に陳列せられてあつたからである。此出品のものは當時界爵故細川潤次郎翁の所藏品で、元は翁の女婿で日露戦役旅順包圍軍參謀で露軍勸降使として有名な砲兵中佐故山岡熊吉氏が某所で獲られたのを、翁に寄贈せられたのである。細川男の書簡が添附してあつた。其後仄に聞くにこの書は今は大槻家に珍藏されてある相である。向京都帝國大學附屬圖書館にも所藏されてある。最近耳にする所に依れば、同大學教授羽田博士も所藏されてゐるとの事である。自分は去月露國人某氏から本書を購入した。自分の管見の及ぶ限では此四部しか其所在を知らぬのである。學友の露國人ニコライ、アレキサンドルウキツチ、ネブスキー君 (Nikolay Alexandrovich Nevsky) の話にも、彼邦でも少ない様である。只自分は刊行後六十有餘年より經たない此一辭典が、本邦少數の人士の外廣く世人に知られて居ないのを遺憾に思つて、本稿を草して茲に公表した次第である。刊行後餘り年月も過ぎないのに斯る有様であるのを歎くのである。

此辭典編纂者の經歷であるが、本書の編者ゴシケイウイツチは、序文にも見える如く露國海軍士官で、露土戰爭に參加した様である。其出生地や其軍務上の履歴は自分には未詳であるが、出生地はウィルナ (Wilna) であるらしい。其は氏が晩年此地に老を養つて居たから推測するのである。只自分の知つて居る所は、日本開國當時最初の函館駐在露國領事として八九年の間に在留して、この間に外交上手腕を振ひ、就中文久年間露國軍艦對馬碇泊事件の際函館から同地へ航行し我使節と折衝を重ね、慶

應の初年に任を解いて歸國した事である。然し此辭典の自序から考へると、氏は日本語の知識を有し、已に此書編纂を仕遂げた程であるから、當時露國に於ける日本通の一人であつたと思はれる。本邦へ派遣せられた時は餘程老年であつた様で、已に白髪であつたので白髪領事と呼ばれて居た六十歳位であつたといふ。氏は一八六八年(明治元年)に老を養つてウイルナに居たから七十歳以上まで生きて居た様である此以外の事蹟は未詳である。

次に補助者であつた日本人橋耕齋の經歷は如何といふに、これは吾々に大に感興を興へるものである。此人の事蹟については、已に約三十年以前に「郵便報知新聞」に其詳傳が掲げられ、又明治二十年五月「讀賣新聞」にも見え、次いで一八九四年一月(Japan Weekly Gazette)にも記され、近くは東京經濟雜誌社編「大日本人名辭書」に「増田甲齋」として詳細な傳記が載せられて居る。今自分は左の二書所載の分が簡にして要を盡して居るから、それを下に抄出して示さう。

渡邊修二郎著「世界ニ於ケル日本人」(明治二十六年六月九日)に曰はく。

増田甲齋モ亦露國ニ歸化シタル一人ナリ、増田ハ掛川藩士、初メ立花久米藏ト稱ス、砲術ヲ善クス任俠ヲ喜ビ、常ニ殺伐ノ巷ニ往來ス、後髮ヲ剃リテ日蓮宗ノ僧トナリ、池上本門寺ノ執事ニマデ昇進ス。嘉永中(一八五〇年代)露國軍艦ノ伊豆海ニ來ルヤ、奮然緇衣ヲ脱シテ之ニ赴キ、竊ニ船長ニ謀リ、同國ニ渡リテ、露語ヲ修メ、傍ラ日本語ノ教授ヲナシ依テ日本語學校ヲ設立ス、當時幕府ノ海外ニ行ク者ヲ處スルコト嚴重ナリシヲ以テ、已ムヲ得ズ、露國ニ歸化シ、名ヲ改メテ「ヤマトフ」(大和夫)ト稱ス、既ニシテ露廷ニ召サレ、「アレキサンドル第二世」ニ事ヘ、歴進シテ外務官トナリ、

素堂スダウ備叔王武ブツ第三等勳章ヲ授ケラル。明治六年岩倉全權大使露京ニ至リシトキ、之ニ面シ、諭シテ歸朝セシム。其官ヲ辭スルニ當リ、露帝其勤勞ヲ賞シ、年金三百「ルーブル」(凡二百二十五圓)ヲ與ヘ、且ツ旅費(七百「ルーブル」)五百二十五圓)ヲ給ス。歸朝ノ後姓名ヲ改メテ増田甲齋ト稱ス。門ヲ杜シテ世交ヲ絶チ、優游老ヲ養ヒ、明治十八年五月病ヲ以テ歿ス、年六十五。増田甲齋ハ山田長政ト類ヲ同ウシテ微ナル者ト云フベキナリ。(二七四—七五頁)

關根只誠編「名人忌辰錄」下卷

(明治二十七年八月十五日刊)に曰はく。

増田甲齋 遠州掛川藩士、姓立花稱久米藏、一旦日蓮宗の僧と成る。嘉永年間魯國に歸化し、後歸國して増田甲齋と改め砲術をよくす。露國にて日本語學校を設立せりといふ。明治十八年五月三十一日歿す、歳六十五、麻布源正寺に葬る。(十丁ウ)

とある。これで見ると耕齋の海外に赴いたのは、一八五四年(安政元年)十二月に露國軍艦下田に入港し、使節プーチャンが再度我邦に修交互市を求めた時のである。吉田松蔭が米艦に乗込ようとして失敗した時と同時代で、兩者を對照して吾々に一種の感興を惹起さしめるものがある。松蔭は雄圖空しく伸べるに由なく、後年遂に刑死するに至つたが、耕齋は異郷に大に手腕を振ひ、樞要な地位に累進したのを想ふと、吾々に取つても感慨に堪へぬものがある。然らば耕齋は當時如何なる方法手段を以て露艦に容易に乗込んだかといふに、其は近く山本秀煌著「近世日本基督教史」(大正十一年一月刊)「横濱天主堂事件」の條に、

蓋し是より先き數年前露國の水師提督プーチャーナン(Poutanine)が下田に碇泊し居りし時、一日

軍艦付のグリーキ教會の司祭某が胸に十字架を飾り、下田郊外を散歩しつゝありし時、一人の田舎漢あり突然司祭の許に近付き、懷に秘藏せし十字架を取出し之を司祭に示して曰く、「余は切支丹の子孫にして常にゼスス・マリアを念じ生命よりも大切なる是十字架を信仰の表徴として秘藏し來れり、今御身の胸にある十字架を見て欣喜に堪へず、思はず秘密を暴露しぬ、思ふに御身は切支丹の伴天連にておはさすや」と、且つ問ひ且語り時刻の移るを知らざりき。彼は終に翌日小舟に掉して露艦に至り、露人の好意により本國へ伴ひ行かれしと云ふ。此の物語はタウンセント、ハリスの傳へしものにして、之れを耳にしたるシラル師は覺えず快哉を呼び、天主堂落成の上は、之れを手蔓として何物をか發見し得んと、大に期待する處ありき。(五五七―八頁)

とある。横濱天主堂の新築工事は萬延文久の時代であるから能く符合する。これは耕齋の事であると考えへる。勿論人名を明記して無いが、時代や其手段方法から推測すると耕齋であるは確であると思ふのである。耕齋は渡露後四五年を経て此日露辭典の刊行があつたので、當時の露國では此一日本人は餘程重寶な人物であつて、日本の國狀を知るには缺くべからざる者であつたに違ひ無い。明治維新後岩倉具視公一行が歐米巡視の際に説諭せられて共に本國へ歸朝したのであるが、此一行は米國で新島襄氏を得、露國で此橋耕齋を得たのは、大に注目し値する事件である。新島氏は歸朝後耶蘇教傳道や教育に於て大に盡瘁する所があつたが、耕齋の方は歸朝後何等爲す所なく、東京芝増上寺の一室に閉居し、門を杜して世交を絶ち優游老を養うて一生を終つたのは吾々の意外とする所である。これは時の政府が彼を重用しなかつたのか或は彼が故意に世に遠ざかつたのであるか、何が事情の伏在した事で

あるとおもふ。彼は當時の社會では大に任用せらるべき人物であつたに違ひないのである。自分は彼が前年の壯圖と相對比して、其不遇を嘆むと共に、末路の不振を悲むのである。

本書編纂者の事歴は大略以上の如しであるが、吾々は此辭典を以て當時他の外人の日本語研究の業績と比較對照して聊述べようとおもふ。

明治以前の西洋人の日本語研究は之を時代順に見て、南蠻・和蘭・露西亞・佛蘭西・英米の諸系統に分つことが出来るが、十九世紀の新言語學の機運は此諸系統の國語研究の成績を綜合して大成するに至つたのである。最初の南蠻系統のものは姑く之を措くも、一八二〇年代から同六〇年代までの間（文政―慶應）は、歐洲に於て日本語研究熱が勃興したのである。これは我幕末外交上紛議のあつた時代で、この結果でもあらうとおもはれる。殊に此語學方面は餘程隆盛を極めて居る。今其語學についていへば、本書日露辭典刊行以前に於ては上記南蠻系統のもの八部を除いて、古く一七〇〇年代の初に成つたケンペル (Kaempfer) の和獨辭典(未刊)を初めとして、

クラツプロット、亞細亞言語集 (Klaproth: Asia Polyglotta, 1823.)

ランドレンス、ロドリゲス、日本文典佛譯 (Jandress: Elements de la Grammaire japonaise, 1825.)

シーボルト日本語撮要 (Siebold: Epitome Linguae Japonicæ, 1826.)

メズルスト、英和和英語集 (W. H. Medhurst: An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary, 1830.)

同氏支鮮日三語比較語彙 (W. H. Medhurst: Translation of a comparative Vocabulary of the Chinese,

Corean and Japanese language. 1835.

ホフマン、和漢音釋書言字考 (Hoffmann : Thesaurus Linguae Japonicæ, 1835.)

ウキリアムス、日本語綴字 (William : Japanese Syllabaries, 1851.)

フィツマイヤー、日獨英三國辭典 (Pfnauier : Japanese, German, and English Dictionary, 1851.)

ローニー、日本語初歩 (Léon de Rosny : Premières Notions de langue Japonaise parlée et écrite, 1854.)

等がある。又同時代では、

ドンケル、クルチユース、日本文典 (Donker Curtius : Proeve eener Japanische Sprachkunst, 1857.)

ローニー、日佛英三國辭典 (Léon de Rosny : Dictionnaire Japonais-Français-Anglais, 1857.)

ボルレル、日本語のウラルフルタイ語族所屬論證 (Boller : Nachweis, dass Japanische zum Uralaltaischen Stamme gehört, 1857.)

等がある。殊に面白いのは同時代にドンケル、クルチユースの日本文典の刊行である。著者は和蘭取初の長崎領事である斯く時を同じうして他方に露國最初の函館領事が此日露辭典を刊行し、共に其邦最初の日本語學書の出版であるのは奇とするに足るのである。クルチユースの日本文典については、先年自分は本誌に聊所見を述べた。(本誌第二十卷第十二號及第二十一卷第四號所載蘭文創刊日本文典及其著者参照)又ボルレルの論證は斯種問題の提供者として記憶すべきものであるのも亦不思議といふべきである。又少し時を後にしては、一八六一年(文久元年)バジエーがクルチユースの日本文典佛譯 (Léon Pagé : Essai de Grammaire Japonaise de J. H. Donker Curtius, 1861.) を初めとして、

- オーベコック 日本文典初歩 (Alcock : Elements of Japanese Grammar for the use of beginner, 1861.)
- パシエー、ロドリゲス 日葡辭典佛譯 (Leon Pases : Dictionnaire Japonais-Francaise, 1862-1868.)
- ブラウン 日本俗語典 (Brown : Colloquial Japanese, 1863.)
- サンマース 日本語と文典 (Summers : the Japanese language and Grammar, 1864.)
- ローニー 日本語考 (Leon de Rosny : Grammaire Japonaise, 1865)
- リッキンス 日英千句集 (Liggins : One thousand familiar phrases in English and romanized Japanese, 1867.)
- ローニー 日漢辭典 (Leon de Rosny : Dictionnaire des signes ideographiques de la chine avec prononciation usitée au Japon, 1867.)
- ヘズン、和英辭典 (Heburn : A Japanese and English Dictionary, with an English and Japanese Index, 1867.)
- 等があらはれた。殊に最後のヘズンの和英辭典は、爾後永く彼我兩國民に偉大な貢獻裨益を與へたものである。斯くの如く現はれた語學書は何れも其當時の外交上や通交上に實用的必要から著はされたものであるのは疑を容れない所である。此等の外人研究が明治時代に至つて大なる科學的研究の材料となり、基礎となつたことは忘れてはならぬ。それで此ゴシケー、ツイツチの日露辭典もまた後日に於ける露國日本語研究に大なる影響を與へたものであるのは明かな事である。此は特に吾々の注意すべき點である。



以上論述した所で露國創刊の日露辭典につきて大要を示したのである。此書は今日から見れば辭典としては多くの點に於て不備な所があらうが、刊行當時は勿論後年まで彼邦の外交上實用上に偉大の貢獻裨益を與へたのである。況んや後日彼邦に於ける日本語研究勃興の一大動機となつたのを想へば輕々に看過すべからざるものである。又編纂補助者が日本人であるといふ點から見ても、大に興味を惹く所がある。自分は本書に對して其刊行當時と七十年後の現在と相對比して、彼此兩邦の國狀に非常な變遷あるに驚かざるを得ないのである。本書通覽に伴れて、我幕末外交の狀況が眼前に映出せられ彼のプーチャチンやムラツイヨフ (Muraviev) と我使節との折衝の有様を彷彿たらしめる。今や日露交渉はヨッフネー (Yoffe) 氏の來朝で我大官名士との間に開始せられ、圓滿に解決を遂げつゝある。自分は過去を回想して一種の感興が湧出する一方から見れば本書は我幕末外交史の一資料を與へる所がある。自分が本篇を公にした素志は、此不聞未知の一書を世に紹介するに在る。他に何等の希望は有たぬのである。終に臨んで起草に際し、學友ニコライ、アレキサンドルウイツチ、ニブスキ、文學士石濱純太郎二氏が、原文翻譯につき多大の助言を與へられた事を茲に謹謝する。